

児童文化叢書解説編、上笙一郎、富田博之編集、大空社、一九八八年

紙芝居に関する調査

堀田 穰

一、『紙芝居に関する調査』について

今日紙芝居と呼ばれている一二〜一六枚程の印刷されたものは、全盛期の街頭でのそれとは随分違うものであった。そして発生史においては立絵とよばれるものが紙芝居と言われていた。このような発生史と、全盛時代準備期の街頭紙芝居の実態を大変要領よくまとめており、その後の紙芝居史研究の流れを決定したのが、東京市社会局が昭和一〇年に発行したパンフレット、本書『紙芝居に関する調査』である（以下『調査』と略）。

ただし、当時紙芝居を享受する側の児童については内山憲堂、野村正二『紙芝居の教育的研究』（玄林社、昭和一二年）がくわしい。『調査』は凡例にあるように児童保護事業の参考の為おこなわれたが、同時に、失業者を救う一つの新職業として、紙芝居営業の内容、就業概況をとらえている。大衆児童文化がはじめて近代的な新職業として登場した実態を数量的社会史的によく伝える資料なのである。

そして、紙に絵を描いて、それをめくりながら語るといふ形の平絵の紙芝居が興行的に成功したのがまだ昭和五年であり、それ以前の、ペーパーサート様の立絵、そのまた前の幻灯による写絵<sup>うっしえ</sup>、影絵も記憶している人が残っていた時代でもあった。昭和五年に民俗芸術の会が「写し絵」の会を開き、<sup>(1)</sup> 昭和一一年には浅草松屋裏の大黒家で「写絵・立絵」の鑑賞会が<sup>(2)</sup> あったという。

この発生史は複雑から単純へ、という筋道をたどる。寄席芸としてあった写絵が、同じような効果を持ちながら操作の簡便な立絵になり、街頭芸になる。そしてそれがさらに簡便な平絵になるのであるが、生き証人であり、立絵創始者、新さんの立絵を保有していた大河内元三郎に『調査』の担当者、宮島貞二（ミヤジマ・サダジ）は直接この歴史を聞き書きしたのである。

ちなみにこの『調査』の一年前に出された今井よねの『紙芝居の実際』では、歴史についてだけ真田岩尾が執筆し、「のぞきからくり」から立絵、立絵から平絵という説を立てていた。今日では「のぞきからくり」は少し系統が違ふとされ、『調査』の方の写絵↓立絵↓平絵の流れが定説になっているようだ。また今井の本では立絵の創始者が荻原新三郎となっているが、新さんが円朝の弟子だったために「怪談牡丹燈籠」の主人公と同一化されてしまったのだ。

『調査』の内容について戻ると、紙芝居の「歴史」についての記述ほど次の「内容及其の絵」についてはくわしくない。しかし当時の街頭紙芝居が手描きの絵による何百巻とつづく連続物語であり、版が、ハガキ大からだんだん大きくなっていった事が記録されている。手描きであるから、同じ物語は世界に一つしかないのであった。

そしてその世界にたった一卷しかない手描き紙芝居がどのように街頭をまわっていたかが「営業」の項で判明する。それは会員制度である、貸元が物語を創作し、画家に絵を描かせ、それを売人に賃貸するのである。売人は貸元から絵を借りし、飴屋から飴を仕入れて売って生活していた。

新作品は最古参の売人が第一に使用し、順次に使われ、それが終わると地方支部に送られる。絵には説明書きは全然なく、貸元や、それを使った売人から口伝されるのだった。これを「絵をつける」と言った。地方に送る時はじめて裏に簡単な筋を書いたそうだ。これだけでも、紙芝居が、芝居であり、語り芸であることが明らかだろう。現在の印刷紙芝居のように裏に筋が書かれるのが当たり前になるのは昭和一二年夏頃からの警視庁保安興業係による検閲以降である。全盛期を生きた者の証言としては加太こうじ『紙芝居昭和史』（立風書房、昭和四六年）がある。

最後が統計になる。トーキーの普及による映画説明者の失業者が、紙芝居売人に流れたという俗説は、『調査』の数字を見るかぎりでは否定される。前職業が映画説明者である売人は、全売人の一・七七パーセントにすぎない。『調査』冒頭にもどると、凡例の最後に「尚意見に亘る部分は調査担当者の個人的ものである。」とあり、文章の出だしが、

「カチ／＼と云ふ拍子木の音が、春の陽について響き渡ると、無心に遊んで居た子供達が云ひ合せたやうに拍子木の音する方へ駆け出して行く、方々の家からは、子供達があわてふためいて戸も閉めないで走って行く。」と調査員宮島貞二の強い個性が表われた記述になっている。「歴史」についても、大河内の聞き書きとは別に、

紙芝居を一種の飴売りとして見て、まず飴売りの歴史から展開しているのだ。

千歳飴から始まって、要するに大道で芸を見せながら飴を売る色々な風俗を、江戸随筆からひろい上げている。白狐に扮して狐舞を見せた「狐飴」、明治期に入って、唐人服をつけた人形が飴の入った細長い箱の上で踊る「カラのカンコロリン飴」など、飴売りの児童文化史という珍しい試論としても読めるのであった。

## 二、東京市社会局と調査掛、宮島貞二

大正八年に公設貸家、簡易食堂、児童受託所、施療院等都市社会政策を統括する部門として東京市社会局が発足する。設置当初から調査掛が存在し、社会調査、統計などを受け持っていた。

大阪の大原社会問題研究所設立の動機と共通するのだが、これらの傾向をうながしたのは大正七年の米騒動である。しかし東京市では大正九年労働課労働調査掛が置かれ、社会局の調査は「労働者の教育に関する調査」「死亡乳児に関する調査」等、より社会文化的、及び児童に関するものに重点が置かれる事になっていく。その流れの上に、大正一三年の社会年報から登場する「民衆娯楽に関する調査」があり、これが発展して本書『紙芝居に関する調査』という様になると言えよう。何故なら「民衆娯楽に関する調査」では、

### 「一、調査の目的

晩近民衆娯楽問題の高調せらるゝ折柄、寄席、芝居、活動写真の特色変遷傾向等を調査し、以て本局の参考資料たらしめんが為なり。

## 二、調査の方法及時期

資料蒐集、直接調査と間接調査の二方法を採り、前者に於ては、主として、配票調査及実演観察をなし、後者に於ては、斯界権威者の訪問及文献等に依りたり。」（大正一三年、東京市社会年報）とあり、目的、方法はそのままこの『調査』に受けつがれているからである。

担当官が東京市社会局庶務課調査掛、宮島貞二である。当時二七歳、月給七五円であった。富山県高岡市出身、明治四一年一月三一日生まれ。昭和六年三月東京帝国大学文学部仏蘭西文学科卒、このころの教授陣は、辰野隆が助教授、鈴木信太郎と豊島与志雄が講師、中島健蔵が助手等であった。

八月四日に東京市に就職。昭和八年には社会局保護課、昭和九年には庶務課事務員になっていた。そして『調査』であるが、宮島はどこで大河内元三郎らの情報を得たのであったか。

ところで、現在紙芝居の発生史研究の水準を知るには、好著『えとく』（芸双書八、白水社、昭和五七年）がある。その中で永井啓夫が書いている立絵の研究家、森田好學が、同じ東京市職員で当時二六歳のはずであった。明治四二年東京四谷荒木町の生まれ。府立一中から早稲田大学に進み、戦後退職するまで建築局勤めだった。と言う。

子供の頃、招魂社（靖国神社）や市ヶ谷八幡で見た立絵が、急激に消滅していくのを見て郷愁にかられ、悟道軒円玉を通じて大河内元三郎を知る。大河内の所蔵していた新さんの立絵を譲渡される事になるのだ。永井氏は『調査』に述べられた影絵↓立絵↓平絵の流れについては森田の意見が採られたのではないかと推測している。

宮島貞二と森田好學の関係は現在のところ不明である。ただ立絵の創始者が本名不明の新さんであるということは一致し、同世代同職場であった事も状況証拠ではある。

しかし宮島の方は昭和一一年には、その文才を買われたものか文書課書記に異動。昭和一八年退職まで書記、報道係という役を務め森田のように立絵、紙芝居への関心を持続できていたか疑問である。

戦局も激しくなると宮島はそれまで住んでいた横浜から藤沢へ、そこから生地の高岡に疎開する。そこで三年ほど富山新聞の記者をつとめた。放送などにも関わったらしい。

戦後は神奈川県藤沢に住んだ。色々な事業を試みるが、人の良い人だったらしく、だまされたりして失敗したようだ。五一歳の時脳血栓に見舞われ、余生を散歩と静養に費し、昭和五五年九月二九日、七二歳でなくなった。「本当の自由人」だったそうだから、無頼と失意に揺れ動いた人生であったのだろう。

とは言え、一瞬にせよ、宮島貞二の触れた紙芝居の世界にとっては、この『紙芝居に関する調査』は、どうしてもその歴史からはずすことのできない文書になった。文学に深く志していたであろう氏に、そう伝えられるものなら伝えたいものである。

宮島貞二の消息をここまで調べる事ができたのは、東京都立中央図書館の大串夏身氏、東京大学図書館の合田晃一氏の援助協力のおかげであり、それ故尋ね当てることのできた御遺族の提供された貴重な資料のおかげである。ここをここに記して謝意を表明しておく。

注

(1) 永柴孝堂 『視聴覚教材源流 「写し絵」考』 「ペーパーサート脚本集」所収、ひかりのくに、昭和四八年

(2) 永井啓夫 『「立絵」の歴史』 「えとく」所収、白水社、昭和四七年

(ほった ゆたか)



宮島貞二氏（左） 富山新聞社時代